

【研究論文】

アンサンブル曲の編曲と演奏指導における留意点

—音楽を専門としない学生による演奏を想定して—

中野 研也

【要約】音楽を専門としない学生によるアンサンブル演奏のための編曲を行うにあたり、考慮すべきことは演奏曲目の選定と演奏の難易度である。特に後者については、プロの演奏家が演奏するような高度な編曲から、楽器を習ったことのない子供でも無理なく演奏を楽しめるような易しいものまで様々なレベルが考えられる中、演奏技術および曲に対する理解力ともに、演奏者の技量や経験を考慮した上で楽曲の適切な難易度を考えていくこととなる。本稿では、ある程度の音楽経験があり、かつ音楽を専門とはしない大学生を対象としたアンサンブル曲の編曲に際して重視すべき項目について、具体的に何を優先的に残し、何を後回しにすべきか、筆者の編曲例をもとに提案する。また、演奏指導における留意点についても付記した。最終的には、学生が演奏を楽しみながらも「達成感」を得ることを目指すものであり、本稿で取り上げるアンサンブル曲の演奏を通じて、楽曲理解と演奏技術の両面において一定の成果が得られたと考える。

キーワード：アンサンブル、編曲、リズム、ハーモニー、演奏指導

1. アンサンブル編曲の背景

オープンキャンパスや大学祭などのイベント、あるいは学外からの依頼に応じて、学生には公開の場で演奏する機会がある。これらは主に吹奏楽部や軽音楽部が担当することが多いが、地域の子供を対象とした行事やイベントにおいては、保育士・教員養成課程である子ども教育学科に対して出演依頼が寄せられることもある。筆者の研究室に所属する学生の殆どが、高校生までの間に吹奏楽部などの活動を行ったり、個人的に楽器を習ったりした経歴を持っているため、このような依頼には彼らが対応することとなる。音楽活動の経験者が必ずしも研究室の所属学生というわけではないが、研究室単位での活動はスケジュールの調整が行いやすいという利点がある。

この時、考慮すべきことが幾つかある。まず、対象とする子供の年齢層とイベントの性格である。演奏曲目の選定にあたっては、子供たちの年齢層とともにイベントの主旨が演奏を聴くコンサート形式なのか、あるいは参加型の音楽イベントなのか、といったことが判断材料となる。また、演奏する学生の技量と演奏可能な楽器についても考慮しなければならない。音楽の理解力と演奏技術は、音楽経験の多寡によって大きく異なるものであり、さらに楽器編成に関しては、その時点で在籍する学生が何の楽器を演奏できるかにより、半ば自動的に決定される。

本稿では、年長児から小学生までの子供を対象としたコンサート形式の音楽イベントにおいて、ある程度の音楽経験があり、かつ音楽を専門とはしない大学生が演奏することを想定し、アンサ

ンブル曲の編曲にあたってのコンセプトやルールの具体例を提案するとともに、演奏指導における留意点についても書き添える。

2. 編曲の実際

2-1 楽器編成の制約への対応

ここで扱うようなアンサンブル演奏に参加する学生の音楽経験は、次のいずれかに大別される。

- ① 何らかの楽器を個人的に習ってきた
- ② 中学校あるいは高校で吹奏楽部に所属していた
- ③ ①、②のいずれも経験がある

項目①の個人的に習ってきた楽器に関しては、これまで全員がピアノであった。従って、楽器の編成は必然的にピアノと管楽器や打楽器によるものとなる。各研究室への配属規定により、アンサンブル演奏のメンバーは5名前後となる。演奏が可能な楽器は人によって異なり、研究室所属の学生すなわち演奏参加者は、1～2年で入れ替わっていく。アンサンブルの楽器編成は、高音域、中音域、低音域、そしてリズム楽器をバランス良く配置できることが望ましいが、上記の理由により、常に理想的な編成が可能なわけではない。その極端な例を挙げると、所属学生の誰もが吹奏楽部等に所属したことがなく、演奏可能な楽器は全員がピアノだけという年もあった。ピアノやキーボードばかりのアンサンブルは面白みに欠けるため、学生がこれまでに経験したことがない楽器を担当しなければならない状況も起こる。このような場合は、演奏における技術的な制約を考慮した編曲が特に求められる。また、音域のバランスに偏りがある編成となった場合は、もともと広い音域を持つピアノで足りない音域を補う方法もある。この音域の分担については第2章第3節で改めて説明する。

選曲にあたっては、参加者の年齢層とイベントの性格を考慮すべきであると前章で述べたが、これと同時に、学生自身が演奏したいと積極的に思えるような曲目を選ぶことも大切である。そこで、まず好きな曲を幾つか挙げてもらい、その中から楽器編成に合ったものを選び出した後、それを子供たちに楽しんでもらえるかどうかを検討するといった手順で選曲を行う。その結果として、ディズニー映画やスタジオジブリのテーマ曲や挿入歌、あるいはJ-POPなどが選ばれることが多い。これらの曲目は子供たちにとって馴染みがありながらも、普段の保育活動や授業で扱われる基本的な教材ではないため、新鮮さをもって受け入れられるのではないかと考える。また、依頼元から曲目等のリクエストがあった場合は、可能な範囲でこれに応えていくこととなる。

2-2 編曲のコンセプトとルール

独奏、アンサンブルを問わず、編曲に際しては、まず最初に演奏者の技量を考慮する必要がある。また、一口に編曲とは言っても、作品の規模や演奏の難易度において、プロの演奏家が最大

限に演奏効果を発揮できるようなものから、楽器を習っていない子供でも演奏を無理なく楽しめるような平易なものまで多岐にわたる。ここでは、ある程度の音楽経験がありながらも音楽を専門としない学生による演奏を想定し、次の2項目を編曲のコンセプトあるいはルールとする。

- ① 高度な演奏技術を要求しないこと
- ② 原曲の形質を可能な限り損なわないこと

通常、曲について具体的に説明する際には、拍子、テンポ、調性、形式、楽曲構成などの用語を用いる。また、曲の性格や雰囲気表現するときは、曲調、曲想、あるいは「○○のように」といった表現が一般的である。従って「形質」は一般的な表現ではないが、ここでは上に挙げた要素の全てを含むものとして使用する。

無論、項目①と項目②は相反する要素である。例えば①を最優先させたものが、保育・幼児教育や小学校の音楽科における合奏であり、タンバリン、カスタネット、鍵盤ハーモニカやリコーダー等により、誰でも演奏が可能な編曲がなされている。これに対して、②を徹底するならば、専門教育を受けた演奏家による演奏を想定した、要求される音楽の理解度と演奏技術ともに高度な編曲となる。

この相反する要素が両立できる難易度の設定について、筆者は次のように考える。すなわち、プロの演奏家であれば初見で演奏でき、音楽を専門としない人でもある程度の練習を重ねれば無理なく演奏できるような難易度である。この「無理なく演奏できる」ことは、特にアンサンブルにおいて重要である。なぜなら、アンサンブルでは周りの音を聴くことが何よりも大切であり、自身の演奏に精一杯であってはそれが叶わないためである。

そこで、原曲が持つ様々な要素の中から筆者が特に重視したい要素とその扱いについて、具体例とともに解説する。

〈1. 楽曲構成について〉

すべての楽曲は、クラシック音楽であれば「二部形式」、「三部形式」、「ソナタ形式」、「ロンド形式」などの形式を持つ。また、特に歌唱を基本とするポピュラー音楽では、「A メロ、B メロ、サビによる構成」や「ブルース形式」が1コーラス、2コーラスと複数回繰り返され、さらに「前奏」「間奏」「後奏」が必要に応じてここに加わることで楽曲の規模が決まる。これを曲の「尺」というが、ここでは構成上のスケール感を損なわないよう、基本的に「尺」は短縮しないこととする。ただし、次の場合はこの限りではない。

- ・ 原曲が3コーラス以上の規模を持った歌ものである場合に、歌詞を持たない器楽演奏に置き換えることで音楽が冗長になる場合。例えば「前奏」、「1 番」、「2 番」、「間奏」、「3 番」、「後奏」という構成の作品は多く見られるが、この場合は「2 番」に相当する部分等をカットすることがある。
- ・ 複数の曲を繋いだメドレーとして編曲とする場合。メドレーを構成する各曲においては、1

コーラスのみであったり、サビを省略したりすることもある。

いずれにせよ、あからさまに簡素な印象を与えないことを期待するものである。

〈2. リズムについて〉

「リズム」の意味は多岐にわたる。例えば、「三拍子」や「四拍子」のように拍の周期を示すこともあれば、「跳ねる／跳ねないリズム」や「軽快な／重々しいリズム」、「○○のリズムで」といった曲調を表す場合もあるが、これではリズムの意味が曖昧になりやすい。そこで、拍の周期については別途「拍子」として明確に区別し、ここではリズムを「様々な長さの音符や休符を組み合わせた結果として、音楽に生じる動き」と定義する。

このように考えた場合、次に示すように、ある一つの曲の旋律部分だけを見ても、そこにリズムが存在することとなる。

例えば、次の旋律は付点のリズムである。

【図表1】「ライ麦畑で出会ったら (Comin' Thro' the Rye)」(スコットランド民謡)より



これに対して、「春の小川」の旋律は、同じ長さの音符で成り立っている。

【図表2】「春の小川」(作詞：高野辰之／作曲：岡野貞一)より



また、ポピュラー音楽においては、フレーズのアクセントと拍の位置がずれた「シンコペーション」のリズムが頻出する。

【図表3】「ルパン三世のテーマ」(作詞／作曲：大野雄二)より



特に、この「ルパン三世のテーマ」のような曲では、初心者向けの簡易版として、次に示すようなリズムを簡略化した編曲が見られるが、この種の簡略化は原曲の形質を損なう恐れが大きいと考えるため、極力行わないこととする。

【図表4】「ルパン三世のテーマ」リズム簡略版



次のような伴奏部分のリズムも、単調さを避けるため ossia に表記したような簡略化は行わない。

【図表5】「王様になるのが待ちきれない」（作詞：Tim Rice／作曲：Elton John）より



ゆったりとしたテンポの曲において、目立たない所の工夫が曲に動きや推進力を与えていることがある。例に示すような、その部分だけがシンコペーションのリズムになっているベースのフレーズを *ossia* のような単純な音型に置き換えると、音楽の動きが単調なものとなる恐れがある。

【図表6】「WELCOME TO JURASSIC WORLD」（作曲：John Williams）より

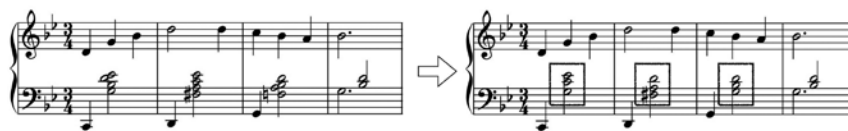


〈3. ハーモニーについて〉

西洋音楽の三要素は「リズム（律動）」、「メロディ（旋律）」、「ハーモニー（和声）」とされている。特にハーモニーは世界中のあらゆる音楽の中で西洋音楽だけが持つ要素であり、ハーモニーの存在こそが、クラシック、ジャズ、ロック等、西洋クラシック音楽とその理論を元とした西洋音楽が全世界を席巻することとなった最大の要因であると考えられる。

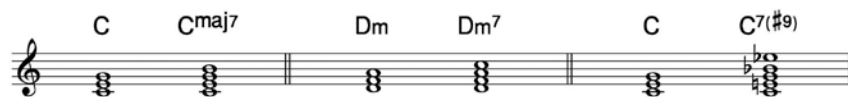
このハーモニーに関しては、セブンスコード（七の和音、九の和音／以下セブンスコードと表記）をトライアド（三和音／以下トライアドと表記）に置き換える類いの簡略化は極力行わないこととする。

【図表7】「人生のメリーゴーランド」（作曲：久石 譲）より



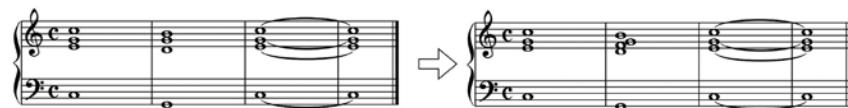
トライアドによって形成された「トニック（主和音）」、「サブドミナント（下属和音）」、「ドミナント（属和音）」，すなわち主要三和音が音楽の進行あるいは行方を支配する機能的なものとするならば，セブンスコードはハーモニーあるいは和音に豊かな表情を与えるものである。

【図表8】トライアド／セブンスコードの対比



あるいは，次に示すドミナント・セブンス（属七の和音）のように，音楽の行方を支配する機能を強化する役割もある。ここでは，ドミナントがトニックへ進行しようとする性質が強化されており，この和声進行を聴いたとき，人はお辞儀とその状態から直立へ戻る行為を反射的に行うこととなる。

【図表9】子供が舞台でお辞儀をするときの和声



続いて，もう1つのコンセプトである「高度な演奏技術を要求しないこと」について論ずる。楽器の演奏技術は長年の訓練によって身に付くものであるため，急速なフレーズや広い音域の跳躍は，演奏において大きな課題となる。筆者は，音楽の基本的な形質を決定づけるのはリズム，ハーモニー，そしてメロディーであり，急速なフレーズは演奏効果を上げる等の装飾的，付加的な役割を担うことの割合が大きいと考える。従って，このようなフレーズは思い切って簡略化し，技術的な負担を軽減させることを優先する。また，アンサンブルであることを活かし，次に示すように1つのフレーズを複数のパートで分担することによっても負担の軽減が可能である。

【図表10】「人生のメリーゴーランド」ピアノ独奏版とアンサンブルスコアとの比較

2-3 音域の分担について

アンサンブルにおいては、各楽器の音域や音色の特徴を活かした無理のない楽器編成が望ましい。しかし、必ずしも理想的な編成が可能なのではない。そこで、響きが薄くなりがちな音域を別の楽器で補う方法の一例を、楽器編成とともに示す。

〈楽器編成の例1：フルート、バリトンサックス、ピアノ、ベース、打楽器〉

本来であれば、クラリネットのような中音域を担当できる楽器の追加が望まれるところではあるが、この編成ではフルート（高音域）とバリトンサックス（低音域）の空白を埋めることができるのは、広い音域をもつピアノだけである。図表11の37～40小節においては、ピアノが和声を受け持つとともに中音域を補完している。また、単調さを避ける目的で、続きの主旋律を「バリトンサックス／ピアノ（41～42小節）※以降「小節」を略す）→「フルート／バリトンサックス（43～44）」→「ピアノ（45）」→「バリトンサックス／ピアノ（46～48）」の組み合わせで概ね2小節ずつ交替させることで響きの薄さを回避するとともに、音色の変化とアンサンブルとしての緊張感を併せ持たせることとした。

【図表11】「風になる」（作詞／作曲：つじあやの）より

〈楽器編成の例2：グロッケンシュピール、マリンバ、ピアノ、ベース〉

吹奏楽等の経験者がいない場合、演奏できる楽器がピアノやキーボードに限られることがある。こうした状況では、フルートやクラリネット、サックス等の楽器をいきなり演奏することは難しい。しかし、鍵盤打楽器であれば音板の配列がピアノの鍵盤と同じであるため、鍵盤楽器の経験者であれば、高度な演奏技術を必要としないフレーズには対応できる。ここではグロッケンシュピールとマリンバを使用し、ドラムセット等のピッチのない打楽器はあえて使用せず、演奏者全員でリズムを表現する編曲とした。また、曲の冒頭で鍵盤打楽器が主に担当した主旋律を、28小節目からはピアノが受け継ぐことで、音色の違いによる曲調の変化を効果的に表現した。

【図表12】「彼こそが海賊」（作曲：Klaus Badelt & Hans Zimmer）より

Glock. Mar. Pno. Bass

〈楽器編成の例3：フルート、ビブラフォン、キーボード、ピアノ、ベース、ドラム〉

ここでは、旋律をフルートとビブラフォンが主に担当し、この2つの楽器を前面に出すことを主眼に置いた。また、響きが薄くなりがちな中音域はピアノの左手パートで補い、シンコペーションなどのリズムを強調する役割も持たせた。

【図表13】「フレンド・ライク・ミー」（作詞：Howard Ashman／作曲：Alan Menken）より

Fl. 1 Vib. E. Org. Pno. Dr. Bass

2-4 メドレーの作成

メドレーは、複数の曲をつなぎ合わせて1つの曲として成立させたものであるが、単に曲を次々と並べただけでは、曲の変わり目が唐突なものとなることがある。そのような時は、経過的な短いフレーズを曲間に挿入することで不自然さを解消することができる。以下、ディズニー映画の5曲「①ミッキーマウス・マーチ、②ホール・ニュー・ワールド、③王様になるのが待ちきれない、④フレンド・ライク・ミー、⑤バロック・ハウダウンをつなげたメドレーを例に、コンデンススコア（主に管弦楽曲や吹奏楽曲を2段の大譜表で簡略に表した楽譜）で示す。囲みで示した箇所が接続のためのフレーズである。

【図表14】「ディズニー名曲メドレー 2020」より

3. 演奏指導の留意点

アンサンブルにはリハーサルが欠かせない。このリハーサルを行うにあたり、指導上の留意点について簡単に述べておきたい。

まず、読譜から演奏技術に至るまで、各パートの個人練習は基本的にリハーサルまでに済ませておくべきであるという意識を持たせることが重要である。アンサンブルのリハーサルは他者と合奏することが目的であり、この時点で演奏上の問題を抱えているようでは、リハーサルが成立しなくなるためである。音楽の専門家やそれを目指す学生はこのことを当然のこととして理解しているが、そうでない学生に対しては、この段階からの指導が時として必要となる。しかし、楽譜のみでは曲を理解できないことも多いため、音源を作成して楽譜と共に渡すことが非常に有効である。さらに、その音源には全員で合奏する最終形の他に、特定のパートの音量を上げて強調したものや、そのパートの音を消してカラオケにしたものも必要に応じて用意する。加えて、Sibelius や Finale などの楽譜作成ソフトは、音源だけでなくスコアやパート譜の上を音楽の進行に合わせてバーが移動する動画も簡単に作成できるため、読譜および曲の理解にかかる時間を大幅に短縮できる。これにより、限られた時間の中で効率的な個人練習とリハーサルが可能となる。

その上で、アンサンブルでは何よりも増して重要なのが、常に自分と周りの音を聴くことである。拍を正確に合わせることをはじめとして、各楽器の音量バランスやフレーズの受け渡しについて、指導者が出した指示について、演奏者がその意義を理解するためには実際に耳で聴いて確認することが必須である。更に言えば、拍の同期や音量のバランス等の基本的な事項は、可能な限り演奏者が自ら気付いて自発的に修正していくことが望ましい。しかし、吹奏楽部等のアンサンブル演奏を経験していない人は、この「聴く」ことの重要性を理解しにくい。

そこで、2パートまたは3パートのみを取り出した練習を行う。次の譜例では、ホルン、ピアノ、ベースが伴奏とハーモニーの役割を担い、フルートとビブラフォンがメロディーを担当する部分を示している。まず、伴奏としての役割を担う三者のみでこの4小節を演奏することで、自分たちの音が曲のハーモニーを形成し、メロディーを支えていることを実感する。このような練習を通じて、必要な音量とそのバランス、さらには音色にも意識が向き、お互いの音を聴くことの重要性を理解していく。

なお、このような練習方法はアンサンブルの指導者であれば誰もが実施していることと推察するが、非常に重要なことであると考えため、あえてここに記した次第である。

【図表 15】「WELCOME TO JURASSIC WORLD」（作曲：John Williams）より



4. おわりに

音楽の基本はアンサンブルであると筆者は考えている。なぜなら、ほとんどの楽器演奏や歌唱はそれ単体では成立し難く、演奏にあたっては伴奏者等の共演者を必要とするからである。また、ピアノ独奏においてはメロディーと伴奏を1人で担当することとなるが、演奏者は常にそれぞれの役割を意識しなければならない⁽¹⁾。

音楽を専門としない学生による演奏を想定したとき、その最終的な目的は、彼ら自身が演奏を楽しみながらも達成感を得ることである。本稿で例示したアンサンブル曲の編曲にあたっては、原曲の形質を可能な限り保持しつつ、ある程度の努力により無理なく演奏できるような難易度を設定したつもりである。これにより、リハーサルの過程で生じる楽曲理解や演奏技術上の問題を自ら解決し、より良い音楽を創り上げていこうとする姿勢が学生一人一人の中に育まれたと考える。そして、このような経験を、彼らが自分なりの方法で教師や保育者としての活動に活かすことにつながればと願っている。

本稿で紹介したアンサンブル編曲とそのコンセプトは数ある考え方の1つに過ぎないが、方法論の一例として参考になれば幸いである。

参考文献

- (1) 中野研也 著 (2023) 「クラス担任による音楽科の授業に関する一考察 ―音楽をするために必要な知識と技能とその修得にあたって―」 仁愛大学研究紀要 人間生活学部編第15号 pp.71-82

使用楽曲

- ・「ライ麦畑で出会ったら (Comin' Thro' the Rye)」(スコットランド民謡)
- ・「春の小川」(作詞：高野辰之／作曲：岡野貞一)
- ・「ルパン三世のテーマ」(作詞／作曲：大野雄二)
- ・「王様になるのが待ちきれない」(作詞：Tim Rice／作曲：Elton John)
- ・「WELCOME TO JURASSIC WORLD」(作曲：John Williams)

- ・「人生のメリーゴーランド」(作曲：久石 譲)
- ・「風になる」(作詞／作曲：つじあやの)
- ・「彼こそが海賊」(作曲：Klaus Badelt & Hans Zimmer)
- ・「フレンド・ライク・ミー」(作詞：Howard Ashman ／作曲：Alan Menken)
- ・「ミッキーマウス・マーチ」(作詞／作曲：Jimmie Dodd)
- ・「ホール・ニュー・ワールド」(作詞：Tim Rice ／作曲：Alan Menken)
- ・「バロック・ハウダウン」(作詞／作曲：Jean Jacques Perrey & Gershon Kingsley)